

奥山興悦理事(31回生)の石巻日日新聞の記事掲載について

2026年9月5日の理事会で、奥山興悦理事(31回生)から紹介がありましたとおり、毎年10月の「法の日」週間には、法務省主催、最高裁・日弁連協力のもとにイベントや資料展示などが行われます。

最高裁からは、奥山氏が石巻日日新聞に連載した“我が人生と石巻”(10回分)が、パネル(大きさは1回分がA3版)化され、法曹会館に10月3日から特別展示されることになりました。

この記事は、奥山氏が東京みやぎ石巻圏人会にて講演された「三淵嘉子さんと私と石巻～ 朝ドラ「虎に翼」に寄せて～」の内容を中心に執筆されたものと伺っています。

この度、石巻日日新聞より東京鰯陵会ホームページへの掲載許可を頂きましたので、奥山氏の“我が人生と石巻”(10回分)を掲載いたします。

東京鰯陵会事務局

連載企画

我が人生と石巻

2024（令和6）年の秋、私は東京みやぎ石巻圏人会の要請で、「三淵嘉子さんと私と石巻」朝ドラ「虎に翼」に寄せ「〜」という講演をしま

三淵さんは、戦前の日



東京みやぎ石巻圏人会での講演（2024年）

本で初の女性弁護士、戦後は初の女性裁判所長となるなど、女性の社会進出の先駆者として活躍しました。

朝ドラの主人公の猪爪寅子も戦前から戦後にかけて、女性法律家として活躍します。司法界という男性社会の中で、「はて？」と素朴な疑問を呈

テレビドラマとしては最も権威のあるギャラクシー賞を受賞するなど、高い評価を得て、来年の2027（令和9）年に映画化されることになりました。

私は石巻で生まれ、大学を卒業後、裁判官として約40年、公証人、弁護士として約20年という司

家庭裁判所で少年事件を担当する女性裁判官で、私は司法修習生でした。

裁判官の仕事の対象は人間です。このため、人生経験が裁判に反映されます。郷里石巻での縁が仕事や生き方に役立ったことが少なくありません。例えば、石巻が誇る日本一のギタリストの阿

第1回「虎に翼」とわたし

しながら、明るく生き抜くというドラマは、主役の伊藤沙莉さんらの好演もあって、若年層から中高年者層、主婦層など一般庶民から法律実務家、研究者など、全国の視聴者から注目され、空前のヒット作となりました。

法の世界を歩んで来ましたが、その間、沢山の出会いがありました。人との出会いが人生に大きな影響を与えることがあります。三淵さんとの出会いもその一つです。

詳しくは次回にしますが、三淵さんは当時、東京部保夫さんにギターを習ったことが、私の人生で大変役に立ちました。また、学生時代に遊び半分て書いた小説が河北新報で佳作に選ばれ、驚き

自分の前に現われ、仰天しました。十数年後、その小説とよく似た事件が本稿では、三淵嘉子さんのことを回想してから、これらについて語りたいと思います。

元東京高裁部総括判事 奥山興悦

弁護士になってからは、長崎原爆の被爆体験者の講演を支援する活動をしたり、東日本大震災で最大の犠牲者を出した郷里石巻の復興と再生のため、ささやかな奉仕活動をしています。冒頭の東京みやぎ圏人会の講演会もその一つです。

連載企画

我が人生と石巻



三淵嘉子さん（「追想のひと 三淵嘉子」所収）

私が司法試験に合格したのは、ケネディ大統領が暗殺された1963（昭和38）年の秋。翌年の春から東京で司法修習

の生活がスタート。裁判・検察・弁護の実務修習は、新鮮な驚きと感動の毎日

でした。東京家裁で少年事件のケース研究が行わ

れ、その指導官が三淵嘉子裁判官でした。三淵さんは大きな瞳と歯切れのいい声、笑うと笑窪（えくぼ）が浮かび、人を惹きつける特別のオーラがあり、少年事件に対する情熱が伝わってきて、たちまち魅了されてしまいました。

これが三淵嘉子さんと

長官の長男である三淵乾太郎判事夫人で、お二人とも配偶者と死別。子連れ同士で再婚し、おしどり夫婦として知られていました。

私は、運よく実務修習中に三淵さん夫妻の薫陶を受けたことが契機となつて、裁判官の道を選び、1966（昭和41）

1970（昭和45）年、法務大臣から法制審議会に諮問された少年法改正要綱は、少年法の対象年齢を18歳未満に引き下げ、18、19歳の年長少年を「青年層」として家裁において刑事裁判手続きにより取り扱うとする大改正案でした。これは少年法や家庭裁判所の理念

の打合せ会が行われ、私は毎回、家裁側の委員である三淵さんと顔を合わせ、いろいろな教えていただきました。

少年法部会の席上では、三淵さんは少年事件の豊富な経験に基づいて積極的に発言。歯切れがよく、温かみのある声で、非行少年には刑罰よりも教育が有効であると述べると、法務省側の委員もうなずくほどでした。結局、三淵さんらの活躍のおかげで、法務省側の改正要綱は棚上げとなりました。

第2回 三淵嘉子さんとの出会い

の最初の出会いです。三淵さんのオーラは終生変わ

に任官（東京地裁判事補）。最初の出会いから7年

像があります。ネットの動画「三淵嘉子・新潟家裁所長記者会見」新潟放送（BSN）がそれです。三淵さんは初代最高裁

問題に直面。

に反するとして、現場の家裁や最高裁、日弁連学界なども反対を唱え、法制審議会少年法部会において毎回激しい議論が展開されていました。このため、毎月開かれる部会の前、最高裁家庭局で裁判所側の委員・幹事

元東京高裁部総括判事 奥山興悦

これより先、私は三淵さんの少年審判を傍聴させてもらい、その見事な采配に感動。少年審判のあるべき理想の姿を発見しました。民事や刑事の裁判と違った心構えが必要であることを現場の裁判官にいかにも伝承してゆくかが私のライフワークとなりました。

連載企画

我が人生と石巻

前回、私は三淵さんの少年審判を傍聴して感動し、それが後に私のライフワークにつながったと書きました。私が審判を傍聴したのは、1972年（昭和47年）6月6日、場所は東京家庭裁判所。家庭局付になって間もないころ、勉強のため、有名な三淵嘉子さんの少年審判官がやさしく問いかけ

ると、少女は、ためらいながら、次のように答えました。
あの日、天気良かったから明るい色のスカートに着替えて出かけたようにしたら、父から「おめえ、近頃色気つきやがって」と言われ、かっとなって家を飛び出し、気が付いたらデパートにいまし

つめました。双方の視線がぶつかり、火花が散ったように感じました。
それまで民事事件を5年、少年事件を1年経験していた私は、事件の原因や背景が理解できませんでした。思春期を迎えた少女に対する「道楽者」の父親が投げつけた心ない言葉。父親こそ問題の中心

輩として助言を与え、いつの間にか審判廷は和やかな雰囲気になっていたのです。
最後に、母親は「今後、夫には私から厳重に注意します」。

こうして審判は40分ほどで不処分で終了。私はまるでドラマを見ていたように感じた。少女の

第3回 私の見た三淵さんの少年審判

た。

三淵さんは少女を退廷させ、母親にスバリ質問、「あなたの御主人は、一言

ではないか。
しかし、三淵さんのその後の采配は私には真似が出来ない見事なものでした。母親が「道楽者」と

父親の発した「色気つきやがって」という言葉、母親の発した「道楽者（もん）」という言葉、それらを巧みに引き出した三淵さんの力量。私は、三淵さんの審判を見て、自分

少年非行の背景に家庭の問題があります。冒頭の写真は、私の課長時代、三淵さんの現役最後の年に作成した記念ポスターで、三淵さんも気に入っていたと伺いました。



家裁創設30周年のポスター

元東京高裁部総括判事 奥山興悦

連載企画

我が人生と石巻

三淵嘉子さんは、明治大学専門部法科に入学。ここから波乱の人生が始まります。

1913（大正3）年に銀行員の長女として生まれ、東京女子師範学校付属高女（現御茶ノ水女子大付属高校）に入学。明るく才能豊かな人気者で、演劇の主役を演じるなど多感な少女期を経験。

1932（昭和7）年、の女性弁護士になりまし



東京朝日新聞（昭和13年11月2日）

た。

1941（昭和16）年、第二次大戦が始まると、弁護士は開店休業の状態となります。結婚して一児を授かりますが、夫は召集され、のちに戦病死。一時、福島田舎に疎開してあばら家に住み、

再起を図った彼女の目標は、裁判官への任官でした。

戦前、女性は参政権もなく、裁判官や検察官になれませんでした。かねて、これに疑問を抱いていたところ、戦後の

改正作業や最高裁民事局、家庭局での仕事に従事。これが後になって大変役に立ちました。

1949（昭和24）年、

念願がかなって東京地裁判事補に任官。民事部の陪席として3年間勤務したあと、1952（昭和

27）年に名古屋地裁判事に就任。当時、駅前電

第4回 三淵嘉子さんの歩んだ道

慣れない農作業に従事したこともあり。戦争と戦後の混乱で、夫のほか両親と弟を相次いで失い、2年間に4回も葬式を出すという悲惨な生活に入りました。

幼子と小さい弟たちを女手ひとつで養うため、

月3日公布された日本国憲法で男女平等がうたわ

光掲示板に「日本初の女性判事着任」というニュースが流れたという。1956（昭和31）年、東京地裁判事となり、三淵乾太郎判事と再婚。民事部の裁判長を経験し

たあと、1963（昭和38）年から東京家裁で少年事件に専念。以後、退官まで16年間を家裁に勤務し、延べ5千人の少年、少女と向き合い、その社会復帰に情熱を傾けました。

元東京高裁部総括判事 奥山興悦

次回、「三淵さんの素顔と俳句」の予定です。

連載企画

我が人生と石巻

横浜家裁の所長時代の三淵さんは、殺風景だった調停室に絵画を飾り、庁舎内の雰囲気をは和らげるため昼休みにバックミュージックを流すなど、新機軸を出し、多くの職員や調停委員から慕われました。浦和時代には、美味しい店を開拓し、親しい知人らと食事

しながら、わいわい騒ぐのが好きでした。私も家庭局付時代、懇親会のと三淵さんらと一緒に銀座の居酒屋へ行ったことが何回かありますが、いつも賑やかで楽しい酒席でした。家庭局の先輩と一緒に自宅へ押しかけたことも2回あります。フアッション



お気に入りのスーツ（三淵邸・甘柑荘保存会）

に関心が深く、流行の帽子をすぐ手に入れて被り、皆を驚かせました。三淵さんの趣味として欠かせないのが家族麻雀。大きい手を狙っていた三淵さんに対し、息子が安い手で上がると、「この親不孝者！」と叱ったというエピソードが伝

長、判事、書記官、廷吏らによる月1回の句会に参加。三淵（旧姓和田）さんは朗らかなので、人気がありました。当時の俳句をいくつか紹介します。

句。初めて東京を離れ、息子と二人だけの穏やかな生活を楽しんでいたことが窺えます。「山争う人の外なる濃竜胆（こりんどう）」これは秀句です。ご本人も一番気に入っていました。私も民事裁判官時代に経験がありますが、

たのでしょう。「人の外なる」という表現は、物理的に外側にいるというだけでなく、醜い人間の世界とは別世界があるという意味を持たせたにちがいありません。

三淵さんは、可憐な花や野草がお好きでした。私は最近になって、竜胆の花言葉が「正義」であることを知って仰天。作者はそれを知って詠んだとすれば、俳句歴20年の私も脱帽です。40代で見事な俳句を作っていたのです。

第5回 三淵さんの素顔と俳句

わっています。絵画や演劇もお好きでした。親しいグループでのゴルフも楽しんでいました。

その三淵さんが俳句を趣味としていたことは案外知られていません。

1950年代の名古屋地裁時代、高裁長官、所

する若い裁判官への送別句。当時は、北陸への転勤は心細かったので、その裁判官は「友は行く」に感激したといえます。「子等の追う先さきを行く目高かな」郊外の森林公園で中学生の息子と遊んだときの

山林の境界争いの事件で現場を検証することがあります。互いに一歩も譲らず、にらみあっている当事者に目を向けた三淵（和田）裁判官は、彼らの背後に濃紫色の可憐な花を咲かせている竜胆を見つけ、深い感慨を覚えたのでした。

元東京高裁部総括判事 奥山興悦

次回は「三淵さんと家事事件」の予定です。

連載企画

我が人生と石巻

三淵嘉子さんの功績は、官としての実績があり、民法の親族・相続の分野について、戦後の立法作業に与したので造詣が深く、家裁に持ち込まれる家事紛争の解決に心血を注がれました。

裁判官の仕事の対象は、民事、刑事、家事、少年の4種類があります。三淵さんは民事裁判



最高裁庁舎前で宮中参内を待つ（昭和52年）

介します。

2歳の男児と4歳の女児を持つ夫婦の離婚調停は、夫婦双方の意見が対立して話がまとまらず、2人の調停委員も困っていました。特に女の子は両親の葛藤に巻き込まれて情緒不安定となり、調停室でも母親から離れよ

たのです。未成熟の子がいる夫婦の離婚事件について特に配慮していた三淵さんの窮余の一策でした。

利益を優先して決めるべきだと調停委員らを指導しました。

に驚きます。私は、これまで三淵さんほど多くの調停委員から尊敬を集めた裁判官を知りません。それは、前回述べた「三淵さんの素顔と俳句」とおり、いつも率直に自分の言葉で話すことが相手の胸に響くからでしょう。

2人の調停委員も困っていました。特に女の子は両親の葛藤に巻き込まれて情緒不安定となり、調停室でも母親から離れよ

結局、父親が男の子を、母親が女の子を引き取ることで話はまとまりましたが、何と、三淵さんは別室で寝ていた男の子を

再婚者の離婚調停でも、過大な要求をする女性に対しては、「私だつて再婚なのよ。少し多すぎませんか？」と直言しました。

私は、昔、少年法改正に関する法制審議会の部会で、笑顔を交えて話される三淵さんを見て、ゲートの格言「本当に自分の胸から出た言葉でなければ、相手の胸を自分の胸に引きつけることは決してできない」を思い出しました。第2回の記事で御紹介した三淵嘉子さんの動画（新潟放送制作）をインターネットでご覧になれば、そのことがわかると思います。

第6回 三淵さんと家事事件

うとせず、裁判官、調停委員と母親のやりとりをさえおびえていました。

おんぶして部屋に戻ったので、調停委員らは二度驚いたといいます。

は、法律論を教えるだけでなく、身をもって家事調停を実践してみせたので、ベテランの調停委員からも尊敬されました。調停委員の研修には特に力を入れ、調停委員たちは三淵さんの言葉をしっかりと覚えているの

三淵裁判官は、それを見て一計を案じ、母親に調停室にある電話の受話器を取るよう指図して退席し、何と隣室の電話から母親に電話で話をし

また、不倫して離婚となったケースでも、子どもがいる場合には、子の親権者・監護権者については、有責者を過度に非難するのではなく、子の

難するのではなく、子の

元東京高裁部総括判事 奥山興悦

次回は「原爆裁判と三淵さん」の予定です。

連載企画

我が人生と石巻

朝ドラ「虎に翼」では、主人公の寅子の所属する東京地裁の民事部の裁判長が、いわゆる原爆裁判（広島、長崎の原爆被爆者が原爆の投下は違法であるとして国家賠償を請求した裁判）で、「米国による広島、長崎の原爆投下は国際法に違反し、違法である」と判決（但し、被爆者の国家賠償の請求は棄却）した場面が放映されました。

実際にも、三淵（旧姓和田）さんはこの裁判に右陪席の裁判官として関与し、判決書に署名しています。この判決の原案を起案した左陪席の裁判官は後に学者になり、判決について書いていますが、三淵さんがどのような意見だったかは、合議

の秘密なので一切触れていません。

左陪席裁判官の年齢（26歳）や関与期間が短いことなどから見て、裁判に終始関与していた三淵さんの考えが反映していた可能性が高く、また、当時の裁判長も三淵さんも、尊敬する初代最高裁

の秘密なので一切触れていません。

「日常生活と民法（補修版）」と随筆集「世間と人間」を刊行。前者の補修を担当した三淵（和田）さんは、後日のエッセイで、「三淵長官の深い学識も温かい人間味に支えられていたからこそ、私の限らない尊敬の的に

傍聴席も閑散としていました。

しかし、この判決により、被爆者の救済に不十分な「政治の貧困」を指摘されたため、国は5年後の1968（昭和43）年には「原子爆弾被爆者に対する特別措置法」を制定するなど、本格的な

や核兵器に反対する気持ちは一・二倍強かったと思われる。

裁判官を定年退官した後、1982（昭和57）年3月8日の国際婦人デーに、当時日本婦人法律家協会長だった三淵さんは、第2回国連軍縮特別総会に向けて、核兵器完全禁止・軍縮のための3千万人署名運動に参加。自ら、新宿西口駅前で通行人に呼び掛けて2時間ほどビラまきをやりました。その行動力に敬服します。

第7回 原爆裁判と三淵さん

長官の三淵忠彦氏の影響を受けて、請求棄却の結果とは別に、原爆投下が国際法に違反するとの判断を示したのではないかと推測も可能です。

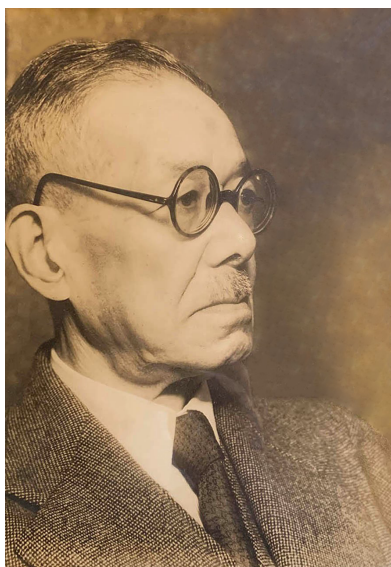
三淵忠彦初代最高裁判官は、在官中の1950（昭和25）年に、市民向

なっています」と述べています。

戦後、我が国における原水禁運動は、ソ連の水爆実験への対応をめぐって対立や分裂を繰り返していたこともあって、この裁判に対する国民の関心はあまり高くない。

被爆者救済に向けた施策が講じられるようになり

三淵さんは生前、原爆裁判のことを一切口にすることはありませんでした。しかし、戦争で最初の夫や両親を失う経験をしていますから、戦争



三淵忠彦初代最高裁判官（三淵邸・甘柑荘／アマナイメージズ）

元東京高裁部総括判事 奥山興悦

次回は「思い出の座談会」の予定です。

連載企画

我が人生と石巻

1982（昭和57）年に最高裁家庭局の私が企画して、三淵さんから家裁のレジェンドによる座談会が開かれました。参加者は、発足当時の家庭局の課長、局付や職員ら8名と我々現役メンバーの4名。初代第一課長の市川四郎さんと初代局付の

戦後間もない1948（昭和23）年12月に、翌

年1月1日の家裁設立をめざして最高裁は内部に設立準備室を設置。その一員となった三淵（旧姓



座談会（昭和57年12月）。三淵さんは前列左から2人目、筆者は後列右端。公の場での三淵さんの最後の写真

和田）さんらは、暖房もない寒い部屋で、日曜・祭日を返上して、大晦日まで毎日朝から晩まで働いたと言います。幼子を抱えた三淵さんにとつて辛い年末だったことでし

ょう。翌年元旦に家裁が発足すると、新聞発表は、何と12月20日でした。新聞発表が遅れたのは、当時日本の予算や財

政を握っていたGHQ（連合国軍最高司令官総司令部）が家裁設立に必要な予算を計上してくれ

に設立準備室は歓喜し、三淵さんらは家裁発足に備えた執務資料作りなどの準備作業に拍車がかかったと言います。

こうして、3時間にわたる座談会のあと、家庭局の元職員も加わった懇親会が開始。たちまち、三淵さんの明るい笑声が響いて、再び思い出話に花が咲き、夜遅くまで歓談が続きました。

第8回 思い出の座談会

設備の定着にはまだ遠く、また、根強い家裁反対論者もあって、高裁長官・所長会同でも家裁廃止論が唱えられたとい

う。家裁が国民に定着するまでには、あと10年はかかる覚悟していたと

の市川さんの述懐に私は驚いたことを記憶してい

た。第一級史料だと気が付き、丸一日かけて、座

談会の速記録を作り、家庭局OB有志に呼びかけて正式な議事録を作成

座談会当時、同時録音が可能な最新型の映写機で撮影した6分間の記録映像のDVDも作成しました。

元東京高裁部総括判事 奥山興悦

それから数年後、この座談会の議事録は、かねて家裁の歴史を研究していたNHK解説委員の清永聡さんの目にとまり、2023（令和5）年に同氏編著の評伝「三淵嘉子と家庭裁判所」にこの座談会議事録が私の解説付きで掲載されました。翌年4月から朝ドラ「虎に翼」が開始。ドラマは清永さんの評伝に沿って進行しました。

こうしてみると、私と三淵嘉子さんと朝ドラは、この座談会を媒介として繋がっているように感じます。次回は「三淵さんのお別れ」の予定です。

連載企画

我が人生と石巻

1979(昭和54)年、家庭裁判所は創立30周年を迎え、最高裁家庭局では記念行事として、家裁から身柄を預かって少年に生活指導をする補導受託者に対し、初の最高裁長官表彰を実施。その第1号として三淵さんがこ



ご退官送別会での三淵さん(右端)と筆者(中央)

ける裁判官の役割」を寄稿。他方で、学者や若い裁判官らによる座談会に出席して、これまでの豊富な体験や少年審判に対する熱い想いを語りました。

同年11月、日比谷公園の松本楼で行われた三淵さんの退官記念送別会に

省の男女平等専門家会議の座長に就任。この会議は当時国会で大詰めを迎えた男女雇用機会均等法案の審議に資するため、「雇用における男女平等の考え方」をまとめるものですが、労使の意見は大きく対立し、政治家の介入もあって、会議は難

できなかった偉業と言われている。これが男女雇用機会均等法の基礎となつて、3年後に法律ができ、我が国における女性の社会進出が飛躍的に伸びたのです。

この最終答申の翌月、三淵さんは前回記事の「思い出の座談会」に出

三淵さんは病床で痛みをこらえながら、男女平等問題の行く末が気掛かりだと語りました。

1984(昭和59)年5月28日、骨ガンで逝去。正に、三淵さんは自らの寿命を縮めてまで、女性の社会進出の先駆者として活動されたといえるでしょう。

6月23日に青山葬儀場で行われた告別式には、三淵さんが生前に浦和家裁で行った講演の音声は

第9回 三淵さんとのお別れ

は沢山の関係者が参加し、ご本人のしみじみとした挨拶や退官を惜しむ知人友人らのスピーチが相次ぎ、明るく華やかな送別会となりました。写真は、その席上で撮影されたものです。

三淵さんは退官後ゆっくり休む暇もなく、労働

三淵さんは退官後ゆっくり休む暇もなく、労働

航しました。

しかし、三淵さんの男女平等にかける情熱と、座長としての公平な姿勢や明るい童女のような人柄が全員から信頼されて意見がまとまり、

1982(昭和57)年11月、最終報告書を提出。三淵さんでなければ達成

席。翌年の1983(昭和58)年に入ってから

にわかに体調を崩され、6月に入院。ガン細胞が発見され、以後激しい身体痛みとの戦いが始まり、病状を心配する沢山の見舞客の一人である渡辺道子日本婦人法律家協会会長に対して、三

元東京高裁部総括判事 奥山興悦

次回は「三淵さんが遺したもので、三淵さんの回想を終える予定。

我が人生と石巻

三淵嘉子さんは多くの人に惜しまれながら、70歳を目前にして亡くなられましたが、後世に大きな遺産を残しました。

その一つ目は、偉大な女性の先駆者に対する追悼記録です。「追想のひと三淵嘉子」は、三淵さん

の遺志を継ぐ野田愛子さん（元札幌高裁長官）らが中心になって、没後1年目に発刊した貴重な追悼文集です。

私はこれまで、これほど多彩で内容の深い追悼文集を読んだことはありません。貴重な写真と



少年友の会員による三淵邸見学（令和6年）

140名の投稿者がそれぞれの時代における三淵さんとの思い出を熱く語り、それが三淵さんの生涯を鮮やかに物語っているからです。追悼文を寄せた人々も殆んど鬼籍に入られたので、今や大きな文化遺産となつています。浦和家裁関係者による追悼文集「しのぶもぢずり」もこれに次ぐ遺産

でした。少年には刑罰に代えて保護を与えるという制度は新しい刑事思想の潮流に乗って、またたく間に欧米各地に広まり、アメリカの有名な法理学者のロスコー・パウンドは、これを「マグナ・カルタ以来の司法における最大の進歩」と称賛しました。

三淵さんは家裁発足の援団体「少年友の会」を立ち上げました。現在では、全国すべての家裁に対応して、少年友の会が結成されています。これは三淵さんの大きな遺産です。私は、現在、東京少年友の会の顧問です。

三淵さんは司法の世界で女性の先駆者として活躍し、女性差別発言に対しては強く反発し、女性の地位向上と社会進出に貢献。現在、裁判官や検察官の女性割合は約3割、弁護士は約2割です。女性差別を測るジェンダーギャップ指数の第1位はアイスランドで、日本は2025（令和7）年で第118位、先進7か国中の最下位です。泉下の三淵さんは、これをどう思われるでしょうか。

第10回 三淵さんが遺したものの

です。

遺産の二つ目は、全国にある「少年友の会」です。三淵さんが半生を捧げた家庭裁判所は戦後の日本に誕生した新しい司法組織です。

アメリカのシカゴに世界で初めて少年裁判所が誕生したのは1899年

直後にアメリカ各地の家庭裁判所を見学し、非行少年の更生には民間団体の援助が不可欠であることを知り、東京家裁時代の1966（昭和41）年に、所長の内藤頼博さん（朝ドラ「虎に翼」の「頼安」）らとともに、非行少年に対する民間の支援

元東京高裁部総括判事 奥山興悦

今回で三淵さんの回想物語を終え、次回からは、私自身の回想録に入り、その初回は「戦中戦後の石巻の幼少期」の予定です。